

大学生における強迫傾向（生真面目さ）と 進路未決定の関連について —学生支援の視点から—

広 瀬 香 織

本研究では、先行研究における深刻な進路未決定者のパーソナリティ特性記述および学校文化との親和性から「強迫」概念に着目し、大学生における強迫傾向（生真面目さ）と進路未決定の関連について、心理・行動の両側面から検討を行った。

その結果、心理面については、進路未決定の3つの下位尺度（「未熟・混乱」「回避・安直」「決定」）すべてにおいて強迫傾向高群・低群間に有意な差異が認められ、「未熟・混乱」「回避・安直」については低群より高群が有意にそれらの傾向が高いことが示され、「決定」については高群より低群が有意にその傾向が高いことが示された。さらに、強迫傾向の4つの下位尺度得点（「侵入的思考」「確認強迫」「洗浄強迫」「不決断」）を独立変数、進路未決定の各下位尺度得点を従属変数とする重回帰分析を行ったところ、「未熟・混乱」と「侵入的思考」「不決断」「回避・安直」と「侵入的思考」との間に高い正の関連性が認められ、「決定」と「不決断」との間に負の関連性が認められた。また、行動面については、エントリー（資料請求）数およびエントリーシート（履歴書）提出数いずれにおいても強迫傾向高群・低群間で有意差は認められなかったが、進路未決定との正の関連性が認められた侵入的思考および不決断について、それぞれ高群・低群に分け同様に検討したところ、不決断傾向高群は低群に比べ、有意にエントリーシート（履歴書）提出数が少ないことが示された。これらの結果から、強迫傾向の認知的側面と進路未決定との関連性が明らかになった。最後に、強迫傾向の高い学生に対して有効と思われる処遇についての試案と、今後の研究に向けての考察を行った。

キーワード：強迫傾向（生真面目さ）、進路未決定、侵入的思考、不決断、学生支援

問題および目的

本稿は、進路についてなかなか意思決定できず、進路関連行動に踏み出せない大学生への有効な支援方法を構築するためのパイロット・スタディである。

現在、就職超氷河期と言われた一時期と比べ、雇用環境はやや好転しつつあるものの、依然として大学生の次の進路へのスムーズな移行がなされているとは言い難い。文部科学省「学校基本調査」によると、2007年3月に大学（学部）を卒業した者のうち、一時的な仕事に就いた者（フリーター）は1万3千人、就職・進学・臨床研修医・専門学校・一時的な仕事のいずれにも該当しない者は6万9千人で、いずれも前年より若干減少はしているものの、全体に占める割合は両方合わせて15%近く、すなわち、6～7人に1人が正規の就職も進学もせず卒業を迎えており、決して軽視出来る数字ではない。

このような情勢に鑑み、近年、大学での就職支援の在り方も変化してきている（那須、

2004)。就職とは、単に就職活動にまつわる諸技能を身につけるだけで成就できるものではなく、それ以前に、どのような方向に進路を見定め行動していくかを決めるという、進路意思決定の問題がある。大学生にとって、卒業後の進路を決めることは、Erikson (1968) のいう青年期の発達課題である「アイデンティティの形成」、すなわち自分とは何ものであるかを問い、また社会の構成要因を再検討し、社会との調和したあり方を見つけて行くことと密接に関連している。すなわち、進路意思決定は、すべての学生が青年期における心理社会的発達に伴い通過する課題であり、学生の進路意思決定をいかに支援するかということは、就職支援という点においても、発達支援という点においても重要な視点であると考えられる。

実際、大学の学生相談室あるいは保健管理センターには、進路選択の悩みを主訴として来談する学生が多い(松尾、佐野、1993 森田、1999)。その中で、特に対応に苦慮する学生のタイプの一つとして、ぐずぐずと決定を先延ばしにし、なかなか意思決定できない学生が挙げられる。このような学生は、従来の進路未決定研究において「*indecisive* 型」とよばれるタイプに相当し、誰もが一時的に通過する暫定的な進路未決定状態とは異なり、深刻な進路未決定状態と位置づけられている。「*indecisive* 型」はその名の通り不決断が主な問題であり、その決められなさは、進路や自己に関する様々な情報の不足から生じるのではなく、慢性的な不安から生じるとされている(Tyler, 1961 ; Goodstein, 1965 ; Crites, 1969)。また、このような学生に対するアプローチ方法としては、ガイダンスや情報提供といった進路指導はあまり有効ではなく、パーソナリティの問題に働きかけるような個人カウンセリングが有効であるとされている(Fuqua & Hartman, 1983)。しかしながら、大学内における相談業務という枠組みで考えた場合、その時間的・マンパワー的制約上、長期的な関わりを要する個人カウンセリングにのみ頼るのは現実的ではない。大学において、このような学生への有効かつ現実的なアプローチを行うにあたっては、再度、このようなタイプの学生のパーソナリティの問題について検討し、それに鑑みた短期的ないしは集団で施行可能な介入方法の開発が急務の課題となるであろう。

ところで、先述した不安および不決断という二つの特性から「*indecisive* 型」をみた場合、これらは精神医学および臨床心理学における概念で言うところの強迫との関連が深い。強迫とは、心理的防衛機制、すなわち不安や恐怖や無力感等の心理的苦痛から身を守るための方略の一つであり、Salzman (1968) は、健常者¹⁾の不安に対する強迫的防衛という正常な利用から、強迫神経症(現在の DSM- IV -TR における不安障害の 1 タイプである強迫性障害)まで幅広く認められるスペクトル(連続体)であるという見解を示している。また、Reed (1977) は不決断を強迫性障害の中心的症状と見なし、Sachdev and Malhi (2005) も、強迫性障害を意思決定の障害であるとする見方を示している。健常者の強迫性と強迫性障害における強迫性との異同については様々な議論があるが、健常者と強迫性障害における強迫症状と間には、ある程度構造的な一貫性があり、類似した症状であるという指摘も認められる(Hodgson & Rachman, 1977)。健常者を対象とした研究としては、Frost and Show (1993) の研究が挙げられる。Frost らは健常な女子大学生を対象に、不決断と強迫性との関連についての実証的研究を行い、不決

1) 健常者とは、精神疾患に関する診断を受けていない非臨床サンプルを指す(丹野、2001)。

断と確認（強迫）、完全主義、病的な責任感、失敗への恐れ、行動への疑念、ためこみと正の相関があることを見出している。すなわち、強迫という概念自体は精神医学の領域から生まれたものであるが、その現象は強度や頻度を異として健常者においても広く認められるものであり、不安や不決断と関連の深い現象であるといえる。

このようにみえてみると、従来の進路未決定研究において、深刻な進路未決定者とされてきた「indecisive 型」には、強迫性の高い学生が含まれることが推測される。実際、先行研究における深刻な進路未決定者のパーソナリティ特性に関する記述を見ても、強迫パーソナリティと類似する点が多い。例えば、特性・状態不安の高さ、自己批判性、従順さ、消極性、承認の欲求の高さ（Cooper, Fuqua, & Hartman, 1984）、完全主義で目標や理想が高く、現実とうまく折り合いがつけられず、進路選択に限らずいろんな場面で困惑し、選択肢についても不明確で、決定に際して他者からの支援や是認を当てにするという特性（Savickas & Jarjoura, 1991）、何かに打ち込むことへの恐れと完全主義（Leong & Chervinko, 1996）等が挙げられる。日本における研究としては、小嶋と大嶽（2002）が、「硬さ（rigidity）」と進路への取り組み方の関連性について検討しており、順応性が低く、規律遵守も高いほど（すなわち「硬い」人ほど）進路選択に関する取り組みが全般的に低く、規律に従う傾向が強いほど進路への取り組みに自信がないことを示している。このようなパーソナリティ特性は、強迫パーソナリティの特徴である「堅苦しく、柔軟性に乏しく、几帳面で一面我が強く、杓子定規な性格傾向」（下坂、1975）や「課題の達成を妨げるような完全主義や、硬さと頑固さを示す」（APA, 2000）「徹底的に頑張るよりは負ける前に引き下がる」（成田、1994）と符合する点が多い。しかしながら、強迫という視点から進路未決定との関連性について実証的に検討したものは見当たらない。

そこで本研究では、大学生における強迫傾向と進路未決定の関連について実証的に検討することを目的とする。

ところで、本研究において強迫性に着目した理由はもう一つある。健常者にもみられる強迫性を、日常の言葉に置き換えて一言で表現するなら「生真面目さ」であるが、学校生活の中ではある程度適応的であった「生真面目さ」が、学校から社会への移行段階での進路選択や進路関連行動という文脈になると、むしろ不適応的に作用する可能性が考えられるからである。丹野（2001）は、学校は強迫行為を強化する側面があり（例：答案に名前を書いたか何回も確かめるよう指示する）、ある程度の強迫傾向を持っていたほうが、学校という環境には適応しやすいのではないかと述べている。事実、学生の日常生活を振り返ってみても、時間を守る、遅刻や欠席をしない、期限までに提出物を出す、粘り強く諦めないで頑張る等の行為や態度はポジティブに評価され、そのことが学業成績における成功や、「良好な進路機会」に繋がってきたという側面がある。

しかしながら、「学校」から「社会」への移行が、主に学力の偏差値によって希望する進路への合格率がある程度予測でき、合格するための方略は比較的単一的で明確なものであったのに対し、「学校」から「社会」への移行、すなわち職業選択においては、潜在的な選択肢の数およびそれぞれの選択肢にまつわる情報量が膨大であり、個人の特性にも将来の進路の選択肢にも不確実さがつきまとい（Gati, Krausz & Osipow, 1996）、何をどのように努力すれば、どの

程度確実にその職業に就けるのかといったことが曖昧である²⁾。そのような文脈の中で生真面目さを発揮してしまうと、何が正しいのかという「答え」が一通りでないところからくる逡巡や、「まだ見落としている点があり、十分に検討しつくしていないかもしれない」といった思い（疑惑癖、完全主義）などから、決定に慎重を期するが故に卒業というリミットに間に合わないという、本末転倒の事態に陥ることが推測される。

このように、生真面目さは、学校から学校への移行のように構造が明確で規則性のあるものに対しては適応的に作用するが、職業選択や就職活動のような、多分に不確かさや曖昧さを含むものに対しては、不適応的に作用する可能性が考えられる。すなわち、生真面目な学生にとっては、職業選択という課題は今までの適応パターンが通用しなくなる事態であり、そのような事態は多分に不安を惹起し、職業選択にまつわる行動が滞りがちになることが推測される。

以上のことから、本研究では強迫傾向と進路未決定との関連性について、主に企業就職を念頭においた大学生にターゲットを絞り、以下の2点を仮説とし、心理・行動の両側面から実証的に検討することを目的とする。さらに、その結果をふまえて、進路をなかなか決められない学生に対する短期的ないしは集団で施行可能な介入方法の可能性について、臨床心理学的視点から考察を加える。

仮説1：強迫傾向の高い学生は進路選択に際し困難を来しており、強迫傾向の高さは、進路未決定の予測因子となりうる。

仮説2：強迫性の高い学生は、就職活動への取り組みが滞りがちである。

方法

1. 調査の概要

調査対象は、人文科学系の私立共学大学に通う3年生で、2007年2月初旬に行なわれた就職対策講座（任意参加、有料）の場で調査用紙を配布し、実施した。回答に要した時間は25分程度であった。調査用紙は原則としてその場で回収したが、記入時間が足りないなどの理由から、後日回収した調査用紙もある。有効回答は計135名（男性48名、女性87名）であった。

2. 調査用紙の構成

調査用紙は、所属学科、性別等を尋ねるフェイスシートおよび次の内容から構成された。

(1) 強迫傾向の指標

井出・細羽・西村・生和（1995）の強迫傾向尺度を用いた。強迫傾向尺度は、「侵入的思考」「確認強迫」「洗浄強迫」「不決断」（各6項目）の計4下位尺度24項目から構成されている。「侵入的思考」（何度も頭の中に浮かんでくる妨害的な思考）および「不決断」（あらゆる場面において優柔不断）は強迫傾向の認知的側面を、「確認強迫」（鍵を閉めたか等何度も確認する行為）および「洗浄強迫」（手を何度も洗う等、汚れに対する潔癖さ）は強迫傾向の行動的側面を測

2) 資格（免許）取得と職業（就職）との連続性が高いもの（医師、看護師、教師、保育士等）についてはこの限りではない。

定するものである。それぞれの項目について、内容が自分の日頃の習慣や気持ちにどの程度当てはまるかの回答を求めた。なお、学生の日常生活に馴染みのある行動について回答を求めたほうがよいと判断し、「確認強迫」の項目のうち、「手紙を出す前には、何回も注意深くチェックする」の「手紙」の部分を手紙（メール）」に、また「小切手や書類など、書き落としや間違いがないか何度もチェックする」の「小切手」を「レポート」に変更した。5件法で回答させ、「当てはまらない」を1点、「どちらかといえば当てはまらない」を2点、「どちらでもない」を3点、「どちらかといえば当てはまる」を4点、「当てはまる」を5点として得点化した。なお「不決断」の6項目のうち、4項目は方向を逆転して得点化した。

(2) 進路未決定の指標

下山（1986）の職業未決定尺度を使用した。職業未決定尺度は「未熟」（7項目）、「混乱」（8項目）、「猶予」（7項目）、「模索」（6項目）、「安直」（7項目）、「決定」（4項目）の計6下位尺度39項目から構成されている。3件法で回答させ、「あてはまる」を3点、「どちらとも言えない」を2点、「あてはまらない」を1点として得点化した。

(3) 就職活動への取り組みの指標

大学3年生の2月という調査時期に鑑み、多くの人が取り組み始めていると考えられる（濱中、2007 参照）「就職ナビサイトを通じてエントリー（資料請求）する」「エントリーシート（履歴書）を提出する」について、何社に対してそれらの行為を行ったか（あるいは行っていないか）について回答を求めた。

結果

1. 強迫傾向尺度の構造

逆転項目についての処理を行った後、主因子法による因子分析を行った。その結果、井出ほか（1995）の結果と同様に4因子構造が妥当であることが考えられた。十分な因子負荷量を示さなかった項目を除外し、再度主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。4因子の内的整合性について検討するために α 係数を算出したところ、第3因子の1項目について、当該項目が削除された場合のCronbachの α 係数が第3因子全体の α 係数よりも明らかに上昇していたため削除し、再度主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。Promax 回転後の最終的な因子パターンをTable 1に示す。なお、4因子で22項目の全分散を説明する割合は53.37%であった。因子の命名については、各因子に該当する項目が井出ほか（1995）の結果とほぼ同様であったため、同研究に倣い、第1因子「侵入的思考」（7項目）、第2因子「確認強迫」（6項目）、第3因子「洗浄強迫」（5項目）、第4因子「不決断」（4項目）とした。各因子の信頼性係数はそれぞれ $\alpha = .788, .808, .776, .710$ と高い信頼性が認められた。

2. 職業未決定尺度の構造

下山（1986）の方法に倣い、職業の既決を示す4項目（No.1.8.15.21）を除外し、残りの35項目の評定値に対して主因子法による因子分析を行った。その結果、下山が得た5つの因子は再現できず、固有値の推移状況から4因子構造が妥当であると考えられた。そこで4因子を仮

定して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。十分な因子負荷量を示さなかった項目、複数の因子に大きく負荷する項目を除外し、再度同様に因子分析を行った。4 因子の内的整合性について検討するために α 係数を算出したところ、第 3 因子については $\alpha = .416$ 、第 4 因子については $\alpha = .467$ と十分な信頼性を示す値が得られなかった。そのため、第 3、4 因子に高く負荷していた項目を削除し、再度主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果、2 因子構造が妥当であると考えられ、同様の因子分析を行った。Promax 回転後の最終的な因子パターンを Table 2 に示す。なお、2 因子で 19 項目の全分散を説明する割合は 44.12% であった。第 1 因子は 13 項目で構成されており、適性や興味や選択基準の分からなさ、および不安や焦りに関する項目が高い負荷量を示していたため、「未熟・混乱」因子と命名した。第 2 因子は 6 項目で構成されており、進路について考える意欲の欠如や意思決定の先送り、および安易な決定に関する項目が高い負荷量を示していたため、「回避・安直」因子と命名した。また、職業の既決を示す 4 項目 (No.1.8.15.21) を「決定」因子とした。信頼性係数はそれぞれ $\alpha = .868$ 、.737、.632 とおおむね高い信頼性が認められた。因子分析の結果、下山 (1986) の職業未決定尺度とは大幅に異なる構造となり、「未熟」と「混乱」に含まれる項目、および「猶予」と「安直」に含まれる項目が概ねそれぞれ一つの因子として纏まる形になり、「模索」に関する項目はすべて削除された。しかしながら、本研究では暫定的な進路未決定についての検討は目的ではないため、暫定的な進路未決定と関連が深いと思われる「模索」が含まれないことは特に問題にならないと判断し、そのまま分析に用いることとした。

Table 1 強迫傾向尺度の因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン)

項目 番号	項目内容	I	II	III	IV
I. 侵入的思考 ($\alpha = 0.788$)					
13.	いやな考えが浮かんできて、頭から離れないことがよくある。	.725	.017	-.019	-.097
17.	不愉快な考えが心に浮かんできて、毎日わずらわされているような気がする。	.722	-.007	-.021	-.096
9.	自分をコントロールできなくなって、困ったことをしてしまうのではないかと心配になる。	.645	.059	-.022	.251
1.	不愉快な考えが自然と頭の中に浮かんできて、止めることができない。	.625	-.115	-.061	-.184
5.	頭が勝手にものを考えて、自分のまわりで起こっていることに注意が向けられない。	.487	-.006	-.117	-.288
15.	最も重要なことを優先させることができなくて、仕事が長引いてしまう。	.431	.072	-.017	-.228
21.	理由もなく、自分が病気やケガをしているのではないかと心配になることがある。	.418	.016	.131	-.007
II. 確認強迫 ($\alpha = 0.808$)					
14.	レポートや書類など、書き落としや間違いがないか何度もチェックする。	-.090	.801	-.102	-.105
6.	何かをしたときには、必ず 2、3 回以上チェックする。	-.098	.716	-.093	-.180
2.	手紙 (メール) を出す前には、何回も注意深くチェックする。	-.018	.665	-.105	-.207
10.	ガスや水道の栓、ドアの鍵などを何度もチェックしてしまう。	.113	.586	.129	.201
18.	私は物事を確認しすぎだと思う。	.200	.503	.081	.107

22.	ドアや窓、引き出しなどがきちんと閉まっているか、確かめに 戻ることがよくある。	.125	.484	.273	.219
Ⅲ. 洗淨強迫 ($\alpha = 0.776$)					
24.	他人の汗、唾液などに少しでも触れると、服がひどく汚れて、 何か体に害があるように感じる。	.155	-.184	.758	.003
12.	誰かが前に触っていた物に触れるのは嫌だと思う。	-.052	-.199	.727	-.191
20.	石けんを人よりたくさん使ってしまう。	.016	.095	.692	.065
16.	汚いと思う物に触ったら、すぐにきれいにしないと気が済ま ない。	-.213	.166	.510	-.167
8.	動物に触ったら汚い気がして、すぐに手を洗ったり着替えた りしたくなる。	-.067	.145	.508	-.094
Ⅳ. 不決断* ($\alpha = 0.710$)					
3.	物事を決めるのは早い方だ。	.015	-.063	-.101	.704
11.	気軽に決心することができる。	-.051	-.139	-.183	.567
19.	一度決めた事は、後になって悩んだりしない。	-.204	-.016	.068	.429
23.	何かを決定するような状況におかれるのは嫌いではない。	-.130	.028	-.273	.428

Table 2 職業未決定尺度の因子分析結果（Promax 回転後の因子パターン）

項目 番号	項目内容	I	II
Ⅰ. 未熟・混乱 ($\alpha = 0.868$)			
9.	自分がどのような職業に適しているのかわからない。	.805	-.214
29.	今の状態では、自分の一生の仕事などみつきりそうもない。	.727	.034
22.	誤った職業選択をしてしまうのではないかと不安があり、決定でき ない。	.703	-.104
34.	自分が職業としてどのようなことをやりたいのか分らない。	.674	.060
25.	将来の職業のことを考えると気が滅入ってくる。	.637	.010
24.	職業につけたとしても、うまくやっていく自信がない。	.563	.142
18.	これまで、自分自身で決定するという経験が少なく、職業決定のことを 考えると不安になる。	.543	.134
11.	将来自分が働いている姿が全く思い浮かばない。	.518	.115
2.	自分の将来の職業については、何を基準に考えたらよいのか分らない。	.491	-.033
33.	できることなら誰か他の人に自分の職業を決めてもらいたいと思うこと がある。	.474	.136
16.	自分の職業については、いろいろ計画をたてるが、一貫性がなく次々に 変化していく。	.465	-.026
23.	私は、いつも実現できないような職業ばかり考えている。	.456	-.050
10.	職業決定と言われても、まだ先のことでピンとこない。	.440	.004
Ⅱ. 回避・安直 ($\alpha = 0.737$)			
35.	職業のことは、大学4年生になってから考えるつもりだ。	-.121	.782
27.	自分にとって職業につくことは、それほど重要なことではない。	-.434	.695
30.	将来の職業については、考える意欲が全くわかない。	.270	.602
17.	自分の知っている職業の中で、やりたいと思う職業がみつからない。	.387	.456
36.	できることなら、職業など持たず、いつまでも好きなことをしたい。	.167	.436
14.	自分を採用してくれる所なら、どのような職業でもよいと思っている。	.144	.421

*すべて逆転項目

Ⅲ. 決定 ($\alpha = 0.632$)

1. 自分の職業計画は、着実に進んでいると思う。
8. 自分のやりたい職業は決まっており、今は、それを実現していく段階である。
15. 自分の職業選択には自信を持っている。
21. 自分なりに考えた結果、最終的にひとつの職業を選んだ。

3. 各変数間の相関係数

強迫傾向尺度と職業未決定尺度の各下位尺度について、ピアソンの積率相関係数を算出した。結果を Table 3 に示す。

Table 3 強迫傾向と進路未決定の関連（相関係数）

	未熟・混乱	回避・安直	決定
侵入的思考	.44 **	.43 **	-.21 *
確認強迫	.04	.03	-.08
洗浄強迫	.32 **	.27 **	-.15
不決断	.46 **	.29 **	-.33 **

* $p < .05$, ** $p < .01$

「侵入的思考」と「未熟・混乱」「回避・安直」との間に中程度の正の相関が、「決定」との間に低い負の相関が認められた。また「洗浄強迫」と「未熟・混乱」と「回避・安直」との間に低い正の相関が認められた。さらに「不決断」と「未熟・混乱」との間に中程度の正の相関が、「回避・安直」との間に低い正の相関が認められ、「決定」との間に低い負の相関が認められた。確認強迫については、職業未決定のいずれの下位尺度とも相関が認められなかった。

4. 強迫傾向と進路未決定との関連性

強迫傾向の高い人が進路未決定傾向を示すかどうかを検討するため、強迫傾向尺度の平均点を分岐として、操作的に強迫傾向高群・低群に分け、進路未決定との関連について検討した。強迫傾向高群、低群に該当する人数はそれぞれ 68 名、67 名であり、群間の得点差は有意であった ($t = -15.21, p < .001$)。群間における進路未決定の差異について検討を行うため、職業未決定尺度の各下位尺度得点について t 検定を行った。結果を Table 4 に示す。いずれの下位尺度得点においても、両群間に有意差が認められ（未熟・混乱: $t(133) = 4.40, p < .001$; 回避・安直: $t(103.17) = 4.96, p < .001$; 決定: $t(133) = -2.50, p < .05$)、「未熟・混乱」、「回避・安直」については、強迫傾向低群より高群のほうが有意に高い得点を示しており、「決定」については、強迫傾向低群より高群のほうが有意に低い得点を示していた。

Table 4 進路未決定の各下位尺度における強迫傾向高・低群の比較

	高群 (n = 67)		低群 (n = 68)		t
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
未熟・混乱	2.19	.46	1.83	.49	4.40 ***
回避・安直	1.57	.49	1.23	.27	4.96 ***
決定	1.61	.50	1.84	.52	- 2.50 *

* $p < .05$, *** $p < .001$

さらに、強迫傾向が進路未決定を予測するかどうかを検討するため、強迫傾向の4つの下位尺度得点を独立変数、職業未決定尺度の各下位尺度を従属変数とする重回帰分析を行った（ステップワイズ法）。結果をTable 5に示す。重相関係数はいずれも有意であり（「決定」： $R(R^2) = .33 (.11)$, $F(1,133) = 16.32, p < .001$, 「未熟・混乱」： $R(R^2) = .54 (.30)$, $F(1,133) = 27.65, p < .001$, 「回避・安直」： $R(R^2) = .44 (.19)$, $F(1,133) = 31.72, p < .001$ ）、標準回帰係数については、「未熟・混乱」と「侵入的思考」および「不決断」との間に有意な正の関連が見られ、「回避・安直」と「侵入的思考」との間に有意な正の関連が見られた。また、「決定」と「不決断」との間に有意な負の関連が見られた。上述した以外の各下位尺度については、有意な標準回帰係数は認められなかった。

Table 5 強迫傾向と進路未決定の関連（重回帰分析・ステップワイズ法）

	未熟・混乱	回避・安直	決定
	β	β	β
侵入的思考	.31 ***	.42 ***	—
確認強迫	—	—	—
洗浄強迫	—	—	—
不決断	.34 ***	—	-.33 **
R^2	.30 ***	.20 ***	

*** $p < .001$, ** $p < .01$

β : 標準偏回帰係数 R^2 : 重決定係数

5. 強迫傾向と就職活動への取り組みとの関連性について

先述した強迫傾向高群と低群間において、就職活動への取り組み状況に差異が認められるかどうかを検討するため、エントリー（資料請求）数およびエントリーシート（履歴書）提出数についてt検定を行った。結果をTable 6に示す。エントリー（資料請求）数およびエントリーシート（履歴書）提出数ともに、群間に有意差は認められなかった。次に、進路未決定と正の関連が認められた「侵入的思考」および「不決断」について、それぞれの平均点を分岐として、それぞれ高群・低群に分類したところ、侵入的思考低・不決断低群は40名、侵入的思考低・不決断高群は32名、侵入的思考高・不決断低群は23名、侵入的思考高・不決断高群は40名となった。各群のエントリー（資料請求）数およびエントリーシート（履歴書）提出数の平均値および標準偏差をTable 7に示す。侵入的思考（高・低）と不決断（高・低）を独立変数、エントリー（資料請求）数およびエントリーシート（履歴書）提出数を従属変数とした二要因分散分析を行っ

たところ、エントリーシート（履歴書）提出数において、不決断の主効果 ($F(1,131) = 8.45, p < .01$) のみが有意であった。

Table 6 エントリー数およびエントリーシート提出数における強迫傾向高・低群の比較

	高群 (n = 67)		低群 (n = 68)		t
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
エントリー数	36.84	31.15	33.46	26.14	.68 n.s
エントリーシート提出数	2.12	2.73	2.21	2.60	-.19 n.s

Table 7 4群の各得点の平均値および標準偏差

	高		低	
	高	低	高	低
不決断				
侵入的思考	35.85	35.44	44.39	28.85
エントリー数	34.92	26.15	29.48	22.48
エントリーシート	1.50	1.78	3.65	2.27
提出数	1.78	2.39	3.59	2.71

上段：平均値、下段：標準偏差

考察および臨床的示唆

本調査は大学3年生の2月時点で施行されているが、大学2年生から卒業後2年目までの縦断的調査をおこなった都筑（2007）によれば、大学3年生の11月では学生の4分の3が進路希望先を決定し、そこで決定された進路はその後も継続して希望されていることを明らかにしている。そのような観点から考えると、本研究の調査時期に職業選択に困難を示す学生は、大きな問題を抱えていると考えられる。

本研究の結果、（1）強迫傾向の高い学生は低い学生に比べ、「未熟・混乱」「回避・安直」得点が有意に高く、「決定」得点が有意に低いこと。（2）「侵入的思考」が高いと「未熟・混乱」「回避・安直」が高くなり、「不決断」傾向が高いと「未熟・混乱」が高く、「決定」が低くなること。（3）「不決断」傾向の高い学生は低い学生に比べ、企業へのエントリー（資料請求）数には差異は認められないものの、実際にエントリーシート（履歴書）を書く段階になると、その数が有意に少なくなることが示された。

（1）の結果から、強迫傾向の高い学生は低い学生に比べて、職業選択にあたり、どうしてよいか分からず不安になったり、決めることを避けたり、安易な決定に走ったりしがちであることが示唆された。このことは、強迫性が職業選択においては不適応的に作用していることの一つの証左と言えるであろう。先述したように、強迫性は学校文化において親和的であり、学生はその「生真面目さ」を「適応」的に身につけてきている。強迫性の高い学生に対する職業選択および就職活動への支援にあたっては、まずは今までの適応パターンが通用しなくなることからくる不安や困惑を十分に認識・理解した上で、その「生真面目さ」にフィットする形で支援していくことが必要であると思われる。

例えば、秩序（構成や規則や順序）にとらわれるという特性や、曖昧さを嫌うという特性に鑑み、「自由に」進路選択にまつわる作業に取り組ませるよりも、進路選択の手順についてある程度構造化された枠組みの中でそれらを行っていく方が有効であると考えられる。さらに、それらの一連の作業を学生が単独で行うのではなく、信頼できる年長者が確認・保証を与えるということも重要であると思われる。Pleva and Wade（2006）は、完全主義に対する自助的認知行動療法の効果について、クライアントが認知行動療法の本に基づいて単独で作業を行うという純粋な自助的療法よりも、治療者がクライアントと最小限の接触を持ちつつ、クライアントの自助的作業を支える導き手となりながら行う自助的療法の方が効果的であることを見出している。また、成田（2002）は強迫性障害に対する精神療法のストラテジーについて述べる中で、不安が極度に高いときは、治療者が患者の不安を一時的に預かり、保証を与えることが必要であり、次第に治療者が答えを提示して保証するのではなく、患者自身の判断について問い、患者の答えに対して保証・強化を行なうことによって、患者の不安に対処する能力を育てることが重要であると述べている。このように、確認や話し合いを繰り返し、年長者からの保証が得られることは、強迫傾向の高い学生にとっては不安の軽減につながり、最終的には自ら意思決定を行なうことに寄与するものと思われる。

また、（2）の結果は、先行研究においても繰り返し指摘されている、深刻な進路未決定と不決断との関連を裏付ける一方、侵入的思考との関連性を見出した点において、新しい知見が得られたと言える。また、侵入的思考も不決断も、強迫傾向の認知的側面であり、進路選択に困難を示す学生についての理解を深めるためには、このような強迫傾向の認知的側面に着目することが有用であると考えられる。侵入的思考については、近年、認知臨床心理学の立場からの研究が盛んであり（杉浦、1996）、強迫の認知行動モデルに基づいた認知行動アプローチの有用性が示唆されている（Salkovskis, 1985）。また、不決断については、破局的思考の緩和により、不決断傾向を低減できる可能性が示唆されている（杉浦・杉浦・丹野、2007）。このような認知的アプローチを進路選択および就職活動への支援の中に取り入れていくことは有用であると思われる。また、侵入的思考および不決断が進路未決定の予測因子となりうることから、低年次生の段階からこれらの認知特性に関する心理教育的アプローチを行うことが、予防的観点から見て重要であると考えられる。認知的アプローチは、個別相談だけでなく、授業等における集団に対しての心理教育的アプローチも可能であり、支援対象の幅を広げることが期待できる。

（3）の結果からは、「とりあえずもらしておく」という進路意思決定を必要としない資料請求については、不決断傾向の高い学生も低い学生と変わらず行動しているものの、エントリーシートの提出という進路意思決定を必要とする場面になると、行動が滞りがちになることが示唆された。この結果から、不決断傾向の高い学生については、エントリーシートを提出する前段階で、先述したような形での細やかな指導や支援を行うことが必要であると考えられる。

今後の課題

本研究では、強迫傾向と進路未決定の関連について検討し、強迫傾向の認知的側面に着目することが有効であることが示唆された。本研究は横断的研究であり、因果関係にまでは踏み込

めていないため、今後は縦断研究や階層的重回帰分析等の手法を用いて、強迫傾向の認知的側面と進路未決定との関連についての因果関係を明らかにすることが望まれる。

強迫傾向の行動的側面については、認知的側面と比べて職業未決定との関連性が低く、確認強迫については、本研究では職業未決定との関連性が認められなかった。奥田（1997）は男子大学生のアパシー（無気力）傾向と適応強迫的性格との関連を検討し、確認強迫とアパシーとの関連性を見出している。アパシー傾向もその特性から、職業未決定との関連が深いことが容易に推測されるが、本研究の調査対象者は、春休み期間中であるにもかかわらず、学内で行われる有料の就職対策講座に自ら希望して受講している者であり、そのような積極的態度を示す学生の中にはアパシー傾向を持つ学生は含まれていない、ないしは僅少であったため、確認強迫と進路未決定との関連性が認められなかったことが考えられる。アパシー傾向についても、進路未決定とは切り離せない特性であると考えられるため、今後、アパシーの観点からの研究も進路未決定者への支援を考える上では必要であろう。

また、強迫傾向の高い学生の就職活動への取り組み方についてさらに検討を深めようとするならば、本研究の調査対象者のような、ある程度就職活動に前向きな学生のみならず、就職活動とは無関係の集団から広く調査対象者を抽出し、就職活動への取り組み方の指標もさらに増やしていく必要があろう。

さらに、臨床的示唆において述べたような認知行動アプローチについても、進路意思決定における有効性を実証的に検証していくことが課題となるであろう。

謝辞

就職活動を間近に控えた慌ただしい中、調査の実施にご協力いただきましたキャリアセンタースタッフの皆様、および調査に回答して下さった学生の皆様に、心より御礼申し上げます。

引用文献

- American Psychiatric Association (2000) *Diagnostic and statistical manual of mental disorders fourth edition text revision* : DSM-IV-TR. (高橋三郎, 大野裕, 染矢俊幸訳 (2003). DSM- IV -TR 精神疾患の分類と診断の手引 医学書院.)
- Cooper,S.E., Fuqua,D.R. & Hartman,B.W. (1984) The relationship of trait indecisiveness to vocational uncertainty, career indecision, and interpersonal characteristics. *Journal of College Student Personnel*. 25, 353-356.
- Crites,J.O. (1969) *Vocational psychology*. New York : McGraw-Hill.
- Erikson,E.H. (1968) *Identity:Youth and crisis*. (岩瀬庸理訳 (1970). 主体性（アイデンティティ）－青年と危機－ 北望社.）
- Frost,R.O. & Shows,D.L. (1993) The nature and measurement of compulsive indecisiveness. *Behaviour Research and Therapy*, 31, 683-692.
- Fuqua,D.R., & Hartman,B.W. (1983) Differential diagnosis and treatment of career Indecision. *The personal and Guidance Journal*, 62 (1), 27-29.
- Gati,I., Krausz,M. & Osipow,S.H. (1996) A taxonomy of difficulties in career decision making. *Journal of Counseling Psychology*, 43, 510-526.

- Goodstein, L.D. (1965) Behavior theoretical views of counseling. In B. Steffire (Ed.), *Theories of counseling*. New York: McGraw-Hill. 243-286.
- 濱中義隆 (2007) 現代大学生の就職活動プロセス 小杉礼子 (編) 大学生の就職とキャリアー「普通」の就活・個別の支援－ 勁草書房. 17-49.
- Hodgson, R.J. & Rachman, S. (1977) : Obsessional-Compulsive complaints. *Behaviour Research and Therapy*, 15, 389-395.
- 井出正明・細羽竜也・西村良二・生和秀敏 (1995) 強迫傾向尺度構成の試み 広島大学総合科学部紀要Ⅳ 理系編, 21, 171-182.
- 小嶋明子・大嶽紀子 (2002) 大学生の進路への取り組み方について 心理学紀要 (明治学院大学文学部心理学科), 12, 55-67.
- Leong, F.T.L. & Chervinko, S. (1996) Construct validity of career indecision: Negative personality trait as predictors of career indecision. *Journal of Career Assessment*, 4, 315-329.
- 松尾雄毅・佐野秀樹 (1993) 職業未決定の類型と処遇－アメリカと日本における研究の概観－ 東京学芸大学紀要Ⅰ部門, 44, 273-286.
- 文部科学省 (2007) 学校基本調査 (指定統計第13号). 平成19年度 (確定値).
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/08010901/index.htm
- 成田善弘 (1994) 強迫症の臨床研究 金剛出版.
- 成田善弘 (2002) 強迫性障害－病態と治療－ 医学書院.
- 那須幸雄 (2004) わが国大学におけるキャリア教育の現状と動向－中部、関西、九州の代表的9大学に見る事例研究－ 文教大学国際学部紀要, 15 (1), 81-95.
- 森田美弥子 (1999) 大学生の進路相談事例の分類－来談動機の視点から－ 名古屋大学学生相談室紀要, 11, 12-24.
- 奥田剛 (1997) 男子大学生のアパシー傾向と適応強迫的性格 日本青年心理学会大会発表論文集 5, 27-28.
- Pleva, J. & Wade, T.M. (2006) Guided self-help versus pure self-help for perfectionism : A randomized controlled trial. *Behaviour Research and Therapy*, 45, 849-861.
- Reed, G.F (1977) Indecisiveness in obsessional-compulsive disorder. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 15, 443-445.
- Sachdev, P.S. & Malhi, G.S. (2005) Obsessive-compulsive behaviour: a disorder of decision-making. *Australian and New Zealand Journal of Psychiatry*, 39, 757-763.
- Salkovskis, P.M. (1985) Obsessional-compulsive problems: A cognitive-behavioural Analysis. *Behaviour Research and Therapy*, 23, 571-583.
- Salzman, L. (1968) The obsessive personality (成田善弘・笠原嘉訳 (1985). 強迫パーソナリティ みすず書房.)
- Savickas, M.L., & Jarjoura, D. (1991) The career decision scale as a type indicator. *Journal of Counseling Psychology*, 38, 85-90.
- 下坂幸三 (1975) 強迫神経症 加藤正明他編 精神医学事典 弘文堂. 128-129.
- 下山晴彦 (1986) 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, 34, 20-30.
- 杉浦義典 (1996) 強迫性障害への認知行動アプローチ－概観と展望 東京大学大学院教育学研究科紀要, 36, 331-339.
- 杉浦義典・杉浦知子・丹野義彦 (2007) 日本語版不決断傾向尺度の信頼性と妥当性の検討 信州大学人文科学論集人間情報学科編, 41, 79-89.

丹野義彦（2001）エビデンス臨床心理学－認知行動理論の最前線－ 日本評論社.

都筑学（2007）大学生の進路選択と時間的展望－縦断的調査にもとづく検討－ ナカニシヤ出版.

Tyler,L.E.（1961）Research explorations in the realm of choice. *Journal of Counseling Psychology*, 8, 195-201.